

横浜市立伊勢山小学校

令和元年度 学力向上アクションプラン

1 学校の状況と地域の実態

本校の児童は、素直で真面目な児童が多く、比較的落ち着いた学校生活を送っているといえるだろう。しかしながら、自分の考えや思いを積極的に相手に伝えようと表現したり、すすんで考えをもって実行したりすること、また、相手の意見や考えを正しく聞き取る力にも課題が見られる。そのため本校では、昨年度より子ども達が主体となって学びを深めていくことができる授業の在り方や、異学年での関わりをはじめ、地域の方や様々な職業の方といった、人とのかかわりや様々な体験を通して、社会と自分のつながりを実感できるような教育活動の在り方等について日々授業改善に取り組んできた。さらに今年度は、特別活動を中心に、子ども達が自ら課題を見つけ、自らの手で諸問題について話し合い、解決をしていけるような子ども達の姿を追究していくために研究を重ねていき、子ども達の「協働して課題解決していく力」「自分づくりに関する力」「自らの手でよりよい社会を作り上げていく力」を育てていく。

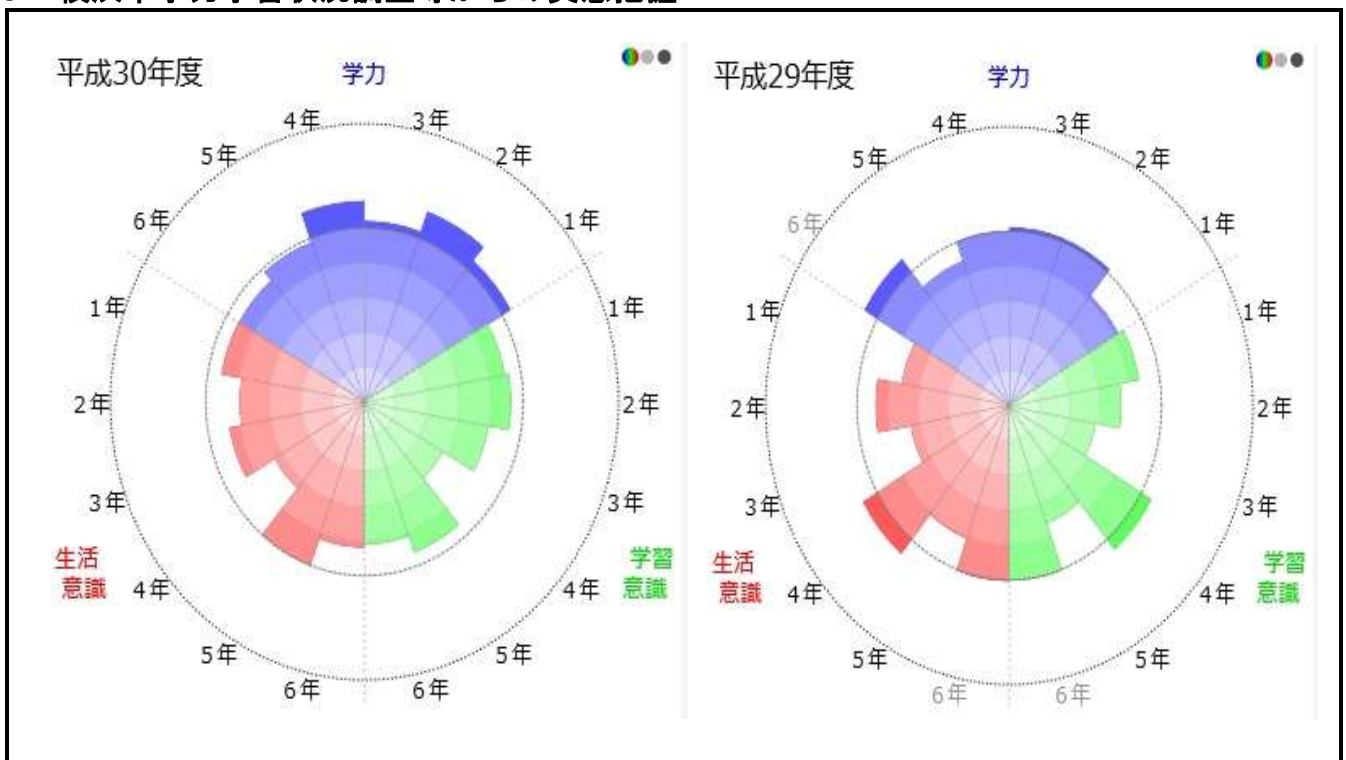
本校の周辺は、多くが住宅地であり、まだ所々に畑が残る所もあり、落ち着いた地域であると言える。一方で、地下鉄の駅も近く、商業施設も近くにある場所であり、生活の利便性も高い。地域からは、学援隊・見守り隊の方々やPTAをはじめとして、本校の教育活動に対し好意的に協力・支援をいただいております。地域を活用した学習を行える環境は整っている。地域の教育力を活用しながら今後も、学力向上という視点からも協力と連携を継続していきたい。

2 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

学力向上に関する指導の目標・方針（令和3年度末の姿）

- 「主体的・対話的で深い学びのある授業」を実践し、子どもたちが協働して課題を解決していく授業が展開されています。
- 配慮を要する児童への対応は個々の授業の中で適切に行われています。また、組織的な対応を継続して行なわれています。
- 教員は授業改善に向けて授業研究を中心とした教員の研究・研修に意欲をもって取り組んでいます。経験豊かな教員の助言のもと、ミドルリーダーを中心とした三部会を核とした組織的な運営を行っています。また、メンターチームの構築なども視野に入れ、経験の浅い教員の研修の場を通して、指導技術を全職員で伝え合うことに一層取り組んでいます。

3 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握



(1) 分析チャートから

ア チャートの傾向

学校全体として、学力に関しては、29年度、30年度と比較すると、全体として前年度の学力を維持、もしくは上回る、といった結果を示している。これは横浜市の平均と、ほぼ同じか、学年によっては上回っている学年もあり、学校全体として学力は定着してきているといえる。学習意識、生活意識については、29年度と比較すると全体的に僅かに上昇した。しかしながら、横浜市の平均と比べると平均値に近づいているものの、平均よりは低いといった傾向が見られる。

イ 児童質問紙から

学習意識では、30年度は昨年度に比べて若干「国語が好き」「社会が好き」「算数が好き」「理科が好き」の項目について、「好き」「どちらかといえば好き」の回答の割合が減少したものの、26年度から結果を追っていくと着実に横浜市の平均値に近づいてきていることが分かる。どの学年も学習意欲は高まり、授業への参加にも意欲が増してきているといえる。また、「授業は分かりやすいですか」という質問に対しても「よく分かる」「だいたい分かる」と答えた児童はおおよそ市の平均と同じくらいの割合となっている。26年度から経年で追っていくと昨年度よりは割合が減ったものの、割合は増加傾向にあり、少しずつ教職員の研修の成果も現れてきているといえる。

生活意識では、「話したり、聞いたり、人と関わったりすることが好き」「自分にはよいところがある」「人の気持ちを考えて行動する」「最後までやりとげてうれしかったことがある」の項目では、「そう思う」の回答の割合が横浜市の半平均に比べやや低い傾向にあった。今後も、主体的な学びや活動がある教育活動を実践し、子ども達自身が自己肯定感や自尊感情を高められたり、互いに認め合ったりする場面や機会を作っていくことが必要であると考え。 「学校は安心できる場所ですか」という質問に関しては「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の解答が僅かではあるが市の平均を上回った。今後も職員全員で子どもたちを見ていく体制を取りながら、引き続き子どもたちが安心して過ごせる環境を作っていくいきたい。

ウ 学校質問紙から

教科指導については、今後も引き続き教師が研究・研修に積極的に取り組み、発問などを工夫し、児童が主体となって学習を進めていったり、課題を解決したりできるような授業づくりを積極的に進めたりしていく必要があると考える。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：高学年になるにつれて自分の考えを「読み取ること」に課題がみられる。
- 算数科：高学年になるにつれて「数学的思考」に課題がみられる。
- 社会科：3年生上の学年で「思考・判断・表現」「技能」に課題がみられる。
- 理科：3年生以上の学年で「思考・表現」に課題がみられる。

(3) 経年変化の状況と要因の分析(学習・生活意識調査も含めて分析)

学校全体としては、29年度に比べて、少しずつではあるが、学力に着実な伸びが見られた。子どもたちが主体となって学習を進めていく授業が展開され、子ども達にとって学習が自分ごとになってきていることが定着につながっている要因の一つであるといえる。また、学習・生活意識についても、毎年着実に向上していることが伺え、そのことも学力の定着につながっていると考えられる。

4 令和元年度 目標と具体的方策

「主体的・対話的で深い学びのある学習」の充実

○子ども達が学習に対して主体的に取り組み、協働して課題を解決し、自ら学びを獲得していく学習の充実

(1) 学校組織としての共通の取組

○子どもが主体の授業スタイルの確立と定着

授業の中で子ども達が疑問やめあてをもち、課題へ向かって解決していくような授業展開を計画し、子ども達が主体的に話し合ったり、調べたり、考えたりする場面を作っていく。

○基礎・基本の定着

朝学習の時間等を活用して基礎・基本の定着を図る。また、学校全体で教材を統一し、安心して学べる環境を整え、子ども達の確かな学力を育めるよう、系統性をもった学習を進めていく。

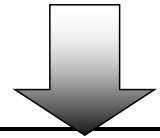
○家庭学習の充実

低学年30分、中学年45分、高学年60分の家庭学習の時間が確保できるよう家庭と個に応じた学習の仕方等についても教職員で共通理解を図り、確かな学力が身に付くよう努める。

○教師の研修・研究会の内容の充実

「子どもが主体となり、協働して課題解決していく授業」となるよう改善するため、重点研究を核として全職員がテーマに沿って授業を充実させていく。

(2)学年・教科等としての取組(仮)



<1年>

わかる授業の展開と、反復練習の積み重ねで、読み・書き・計算などの基礎基本を身につけるようにする。
体験活動を充実させ、自分の思いや考えをもち、進んで表現しようとする姿勢を育てる。

<2年>

漢字スキルや算数ドリル、宿題プリントなどを活用し、学習への取り組み方と基礎基本を身につけられるようにする。
自分の考えや思いを進んで伝えようとする姿勢が育つよう、特別活動などを通して、お互いを認め合い安心して発言できるクラス作りをしていく。

<3年>

朝学習の1Mを計画的に運用し、読み書き等の基本的な技能が定着するよう支援する。
子どもたちの学びたい気持ちを大切に、語彙力が高まるような活動や、数的感覚が身につくような活動を展開する。

<4年>

漢字や計算のミニテストや家庭学習などを継続的に進め、基礎基本の定着に努める。
子どものふりかえりと、身に付けさせたい力や育てたい姿を関連付けた授業づくりを行うことで問題解決に向けての子どもの意欲を高める。
グループやペアなどの学習形態を工夫しながら対話的活動の充実を図ることで、学びを深める。

<5年>

常に子ども自身の問いと疑問を大切に、話し合いや学び合いを中心とした探求的な学習を展開する。
子どもたちの主体的な学びを支える「読む・書く・計算をする」といった基礎基本の習得を大切にした指導を行う。

<6年>

主体的な学びになるよう、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりする学習展開にする。色々な見方・考え方があることを知り、自信につながるよう支援する。
興味や関心のあることの意欲を大切にしたり、自分で学習を継続したりできるよう、自主学習にも取り組んでいく。

<個別支援学級>

- ・しっかり話を聞き、自ら主体的に行動できる力を育む場面を計画的に設定し、成長できるように支援する。
- ・振り返りを行い、自分と友だちの良さに気づくように指導する。
- ・音読や日記の学習を通して、語彙や発言する意欲、伝えようとする態度を育て、双方向の豊かなコミュニケーションの力を伸ばす。
- ・学習したことを、日々の生活の中で生かし、心豊かに、協力しあって過ごすことができるようにする。